

ハルイポット

- Binary Pot -

Set forth and walk about in the "WORLD",
through its length and breadth, for to you I will give it.



オーガストオフィシャルハンドブック
2004年春号

 **AUGUST**

まえがき

こんにちは。オーガストです。
この度は、オーガストオフィシャルハンドブックをお手に
取って頂き、誠にありがとうございます。

さて、2004年3月26日、『バイナリィ・ポット通常版』発
売の運びとなりました。

こちらは、前号のオフィシャルハンドブックやオフィシャル
ウェブサイトにも書いた通り、ユーザーの皆様から頂いた
アンケート葉書のご意見によって、実現することができた
ものです。

皆様にお声を頂けるのは、本当にありがたいことだと考
えております。

何度も書いていますが、アンケート葉書には一通一通ス
タッフが目を通し、励まされたり、反省したり、参考にさせ
て頂いたりしています。

今でも、デビュー作『バイナリィ・ポット』のものをはじめ、
全てのアンケート葉書を大切に保管しておりますし、その
頃から蓄積された皆様の声は、私たちにとって宝物だと
考えております。

ソフト同梱のアンケート葉書をまだお持ちの方は、もしよ
ろしければ、弊社までご送付頂ければ幸いです。

それでは、多少のお時間を拝借致しますが、オフィシャル
ハンドブックをお楽しみ下さい。

2004年春 オーガスト 拝





ごめんね、なまけん

ま、保奈美はほ
いしも世話にならな
からな。

ほなみん100%
べっかんこう



ほら、
おかわ作っただから
食ってこれよ。

うん、ありがたう
なまけん。



それじゃあ

あーん♥

うっ

ドキ





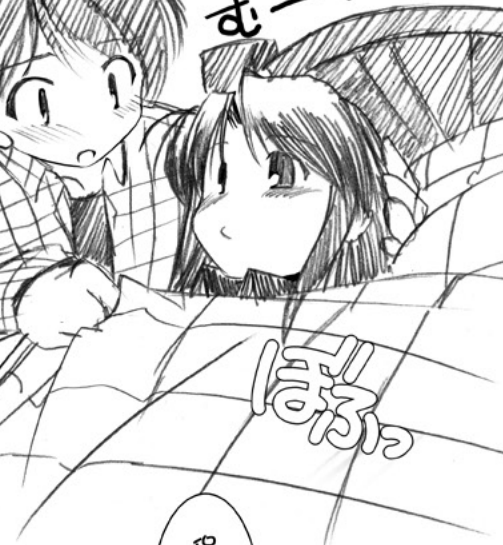
あ、なんだこれ
何かの間違いか
知らぬが、何故か。



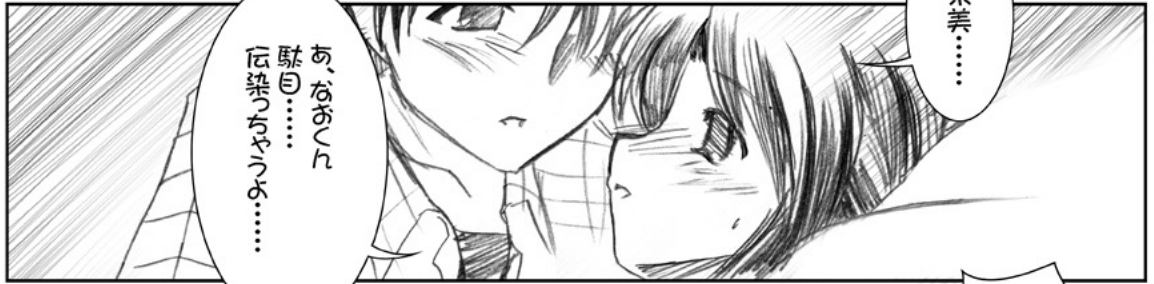
あー



ゴク



ほらっ



保奈美……

あ、おくん
駄目……
伝染っちゃん……



ん

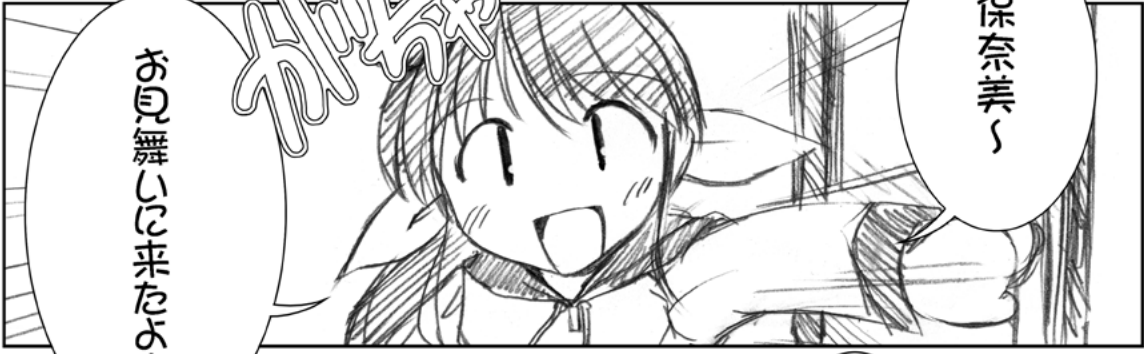
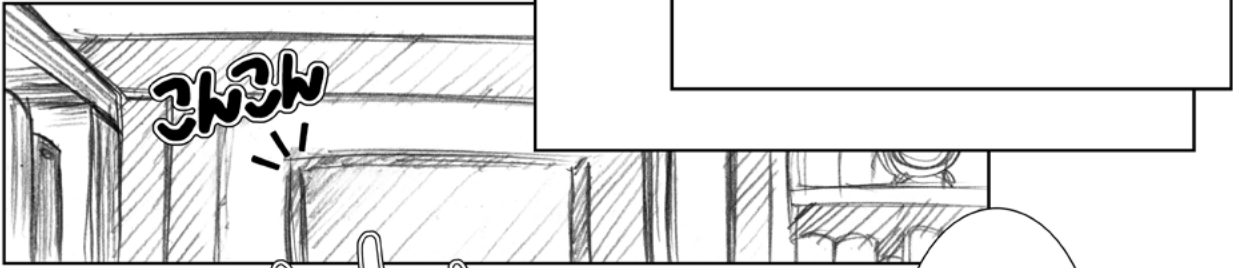


おっ……



構ったか

|||
|||



お見舞いに来たよー

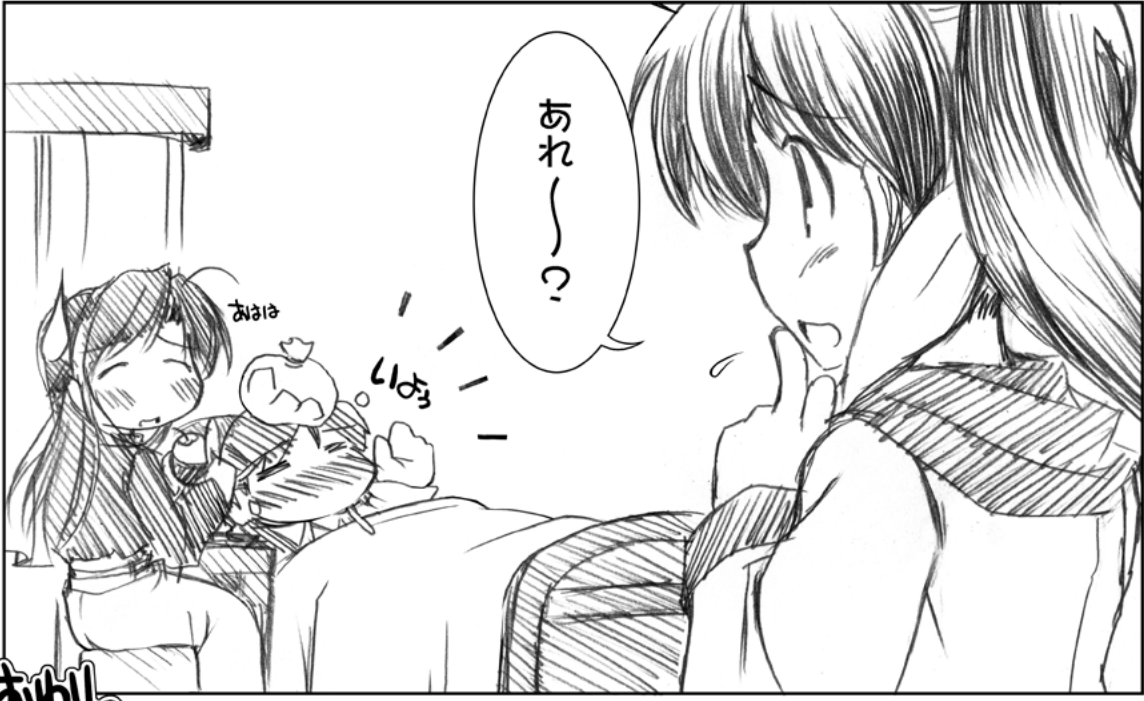
おはっ

保奈美



あれっ

.....



あれ〜？

おは

いっ

おは

「はにはにミニシアター」

春を探して

内田ヒロユキ



「あら久住、いらっしやい」
保健室に入った俺を恭子先生の穏やかな声が迎えてくれた。

教師コンビのもう一人は彼女専用のマグカップを手にくっつけている。

「久住くん、どうしたんですか？」

「ええ、何だかお茶が飲みたくなって」

「ココ、カフェテリアじゃないんだけど？」

白衣の先生がじつとりとした目で俺を見る。

それが肯定のサインだと分かるのは、こんなやり取りを何度も繰り返してきたからだ。

「確かにあそこよりは落ち着きますね」

「つつわ、ナマイキー」

ひよいと肩をすくめて恭子先生は立ち上がった。

学年末試験が終了したのはつい二日前、ほとんどの学生の頭は既に春休みへ飛んでいる。しかし、俺を含め「ほとんど」に含まれない赤点候補生にとっては、テスト返却まで胃が痛い日が続く。

「その言えは、先日の試験はどうでした？」

結先生が穏やかな表情で直球を投げってきた。

「もう採点終わってるんじゃないですか？」

意地悪だなあ」

「久住のことだし、もちろん満点でしょ……はい、コーヒー」

恭子先生が意地悪く笑って席に着く。

「で、どうなの？」

「……実は、赤点の可能性も捨きれない状況で」

「だっさー」

「問題が難し過ぎたでしょうか……」

俺の点数が悪いのは自分のせいとばかりにしようとする結先生。

「どっちにしろ点数低いでしょ久住の場合は。」

藤枝がいつも満点に近いのと一緒」

カラカラ笑っているどっかの養護教諭とは大違いだ。

「結局俺って補習なんですか？」

「……そ、それは言えません」

「いいじゃないですか、多少早く分かってても」

「ダメですよ、テストは一斉に返却しないと」

「俺は構いませんけど」

「事前に点数をもらってはいけない決まりなんです。だからこうして、答案をいつもカバンに入れてるんですから」

と、結先生がバッグに手を入れる。

「……あらっ？」

先生の体が一瞬動きを止めた。

「どうしたの野乃原センセ？」

「……えと」

無言でバッグを漁り続ける。

「あの、結先生？」

「もしかして？」

さしもの恭子先生も緊張した面持ちだ。

「あるはずなんですけど……あれ？ あれ？」

無いことは分かっているはずなのに、教師としての責任感がそうさせるのか何度もバッグ

「あ、結先生？」



をひっくり返して確かめる結先生。
しかしその手も、やがて止まった。

「野乃原センセ?」

「あの、無くしちゃったみたいですよ……どうしましよう、仁科先生」

「今にも泣きだしそうな結先生。」

「どうもこうも、探すしかないじゃない」

「もし見つからなかったら」

「減給ね」

「そんな」

「最悪、懲戒免職」

「ダメですよ」

「ほとんど小さくなっていく結先生。」

「探しましょうよ。見つければ問題ないんでしょ?」

「久住くん……そ、そうですね」

「何か心当たりはないんですか?」

「えっと、確か……先日ここで採点をして」と、目の前のテーブルに視線を送る。

「それからどうしたのよ?」

「どうしましたっけ……」

結先生は顎に指を当てて考えている。

「どうやら、カバンに入れたつもりになっていただけらしい。」

「そこら辺に埋もれてるんじゃない?」

恭子先生がデスクやら棚やらを見回して言う。

「んじゃ、手分けして探しましょう。久住、ア

ンタは棚をお願い」

「了解です」

「私は思い当たることを一通り見てみますね」と、結先生は書類や本が積まれている部屋の隅へと足を向ける。

その背中が無性に寂しく見えて、反射的に声

をかけていた。

「大丈夫ですよ。きっと見つかりますから」

彼女の背中に向かって言う。

「はい」

振り返った結先生の表情には、少しだけ元気が戻っていた。

「……一人で盛り上がりつつあるところ悪いんだけど、久住は答案を見つけても中見ちゃダメよ」

「や、やだなあ、そんなハシタナイ人間じゃないですよ。よし、頑張って探そう」

粘液質な視線に見送られて、俺は書類満載の棚に向かった。

*

成果のないまま一時間が経過し、搜索の場を奥のベッドルームに移した。

部屋の両脇に3つずつ、合計6床のベッドが並ぶ大きめの部屋だ。

「見つからない捜し物ってのは、どうでもいいところに転がってるんだよな。」

諦めに似た感慨に身を任せ、俺はベッドに倒れ込んだ。

「……ん?」

視界のはじっこに、なんだか見慣れたものが入っている。

茶色くて四角い

紙の……封筒

教師が書類を入れるのによく使用する、あの茶封筒が隣のベッド下に落ちていた。

表面には、確かに「学年末考査『古典』2—

B」と黒の油性マジックで書かれていた。

「……」

すぐさま声を上げようとして思い止まる。

封筒の中には、俺の春休みを左右する一枚が入っているのだ。

このまま赤点の恐怖に怯えていては、胃に穴があく日もそう遠くない。結果さえ知ってしまえば苦しみから開放される。

「見てしまいたい。」

「久住は答案を見つけても中見ちゃダメよ」

恭子先生の言葉が脳裏をよぎるが……すぐに通りすぎた。

「もう、相変わらずせつかつかさなんだから。などと脳内で軽く流しつつ、震える手で茶封筒を拾い上げる。」

中には黒い紐で束ねられた答案用紙があった。一番上に載っているのは我らが委員長

の答案だ。秀才に片足突っ込んだような点数でリアクションに困る。そんな委員長の答案の下に斜線が多い答案が透けて見えている。

「……出席番号二番「天ヶ崎美琴」。」

一体、どんなサプライズをくれるのだろうか。暗い興奮と共に答案を一枚めくる。

「ふほっ」

よもや、古典の答案に英単語を見つけたとは思わなかった。サプライズを通り越してアメイジングだ。この世のちっほけなルールでは彼女を止めることはできないらしい。

「すげえよ美琴……」

「ちよっと久住、見つかったの?」

「お手柄です」

俺の声に反応して、隣室から声が飛んでくる。
「あ、これっぽっちも何でもないです」

「紛らわしい声出さないでよね」
「……やっぱり減給でしょうか？」
「果たしてそれで済むかしら？」
「ふえ……さようなら蓮美台学園」

向こうは向こうで楽しくやっているといるらしい。
さて、こっちは大本命だ。数秒後には真実への扉が開く。
俺は、自分の答案までバラバラと紙を送る。

見覚えのある文字が並んだ答案。その右上には、明らかに安全圏と思しき数字が書あった。俺の春休みは、守られたのだ。
込み上げる解放感に今すぐ学園を飛び出した衝動に駆られるが、ここでボ口を出すわけにはいかない。
大きく深呼吸をして表情を引き締め、元通り答案を茶封筒に押し込んだ。

*

「はあ、助かりました」
茶封筒を受け取った結先生が安堵のため息をつく。
「減給にならなくて良かったじゃない」
「春は何かと物入りですし、大変なことになるところでした」
素直に安心した二人の表情。俺が感じていた以上に緊張していたのだらう。
「それじゃあ、俺は帰りますね」
「あら、お茶くらい飲んでくればいいのに」

「久住くんにはお礼を言わないと」
「お礼なんていいですよ。見つけたのがたまたま俺だっただけですから」

「いえ、ちゃんと言っておがなくてはいけません」
「まあ、それで結先生の気が済むなら」
「はい、ぜひ……ありがとうございます」
「まっすくな瞳で俺を見つめる結先生。自分の顔が熱くなっていくのが分かる。」

「あ、えっと……いえ、こちらこそ」
「なにテレしてんのよ？」
「べ、別にテレしてなんていないですよ」
「へー」

適当な相槌を打って恭子先生が意地悪く笑う。率直に言っただけが悪い。

「じゃ、じゃあこれでっ」
「そそくさと鞆をつかみ、保健室の扉に手をかけた。」

「あら、久住？」
「な、なんですか？」
「……この答案、逆さまに入ってるわね」
「馬鹿なっ、俺はちゃんとしてっ」
振り返った俺の目に入ったのは、不気味に笑う教師たちの表情だった。

どこからともなくウグイスの声が聞こえる。

「ちゃんと……どうしたんですか？」
「さっすが、補習を回避した秀才さんは抜かりがないわね」
「……ああ」

——俺の春は遠い

おわり



べっかんこう(以下べ):こんばんは。べっかんこうです。
榊原拓(以下榊):こんばんは。榊原です。
べ:さて、バイナリィ・ポット通常版発売なわけですが。
榊:まさか、2年も経ってから出るとは思いませんでした。
べ:これもユーザーの皆さまのお陰です。
榊:本当にありがたいですよ。
べ:えっと、シナリオは変わってないんでしたっけ。
榊:ええ。誤字を修正した程度です。でも、本当はあちこち直したいところばかりで。例えば、まだゲームの文章に慣れてないから一文が長くて、修飾語も回りくどい。
べ:それは僕もです。テツサンとか構図とか色々とかアシなので。びっちゃけ全部直したかったりします。
榊:まあ今回は、初回版をお持ちの方が通常版を買わなくていいようにして最初から話してみました。
べ:そうでしたね。……でも、こうしてみると2年って短いようで長いなあ。バイナリィ・ポットの頃と比べて、オンラインゲームもずいぶんメジャーになってます。
榊:えー、ではバイナリィ・ポットの感覚変換システムについて、何かありますか？
べ:最近漫画とかで、感覚変換システムみたいなものを見ることがあります。あんな装置が実用化されたら面白そうだなあと。
榊:概念はかなり前からありましたけど。で、実用化されたらどうします？
べ:……バーチャル温泉に行つて、バーチャル宴会つてのはどうかな。
榊:いいなあ、それ。バーチャル西伊豆あたりで。
べ:バーチャル世界にも伊豆ってあるんですが(笑)
榊:でも、感覚変換してネットにダイブできるようになったら、絶対に需要ありますよね。バーチャル温泉。
べ:む……。バーチャルアルコールって、脳の悪そうな気がしてきました。
榊:確かに。胃とかの反応が反映されない分、歯止めが利かなかつたりするかも。
べ:じゃあ、バーチャル布団でバーチャル睡眠でもいいです。くら。
榊:それ、絶対に脳が休まってない(笑)
べ:そうかなあ。無理矢理の波を出すような仕組み、駄目ですか？
榊:次はバーチャルマイナスイオンかな。……さつさとリアル布団で寝た方が生産的です。きつと。
べ:ですね(笑)
榊:それより、早く新作の企画に戻らないと。
べ:今回は難産ですよ。なかなか発表できなくて申し訳ないです。
榊:その分、いいものを作りましょう。……さて粗筋、粗筋。
べ:ラフも、もりもり描きますよー。

2004.3.10 AM3:30 社内にて



あとがき

最後までお読みいただき、ありがとうございました。

今回のオフィシャルハンドブックは、今までになく厳しいスケジュールでの制作となりましたが、お楽しみ頂けたでしょうか。

現在オーガストでは、相変わらず、全員が新作の企画に頭を捻っています。

企画と言っても、キャラのラフ絵を描いたり粗筋を作ったりと、着実に前進はしているのですが……なかなか納得の行くものまで辿り着くのは難しいです。

なので、発表はもう少し先になりそうです。遅れてしまい大変申し訳ございません。

そして、新作とは別に企画を詰めていた『オーガストファンディスク（仮）』ですが、こちらは一部制作を開始致しました。

どういったコンテンツがユーザーの皆様喜んで頂けるか、どれだけ多くの内容を詰め込むことができるか、スタッフ全員で検討を重ね、限界にチャレンジした作品になりそうです。

発売は今年夏を予定していますので、徐々に内容も公開して行けると思います。是非ご期待下さい。

それでは、今回はこの辺で。

今後とも、オーガストをよろしく願い致します。

オーガストオフィシャルハンドブック
2004春号

発行：オーガスト
発行日：2004年3月

 **AUGUST**
<http://august-soft.com/>





オーガストオフィシャル小冊子 2004春号

